

平成3年8月9日(金)~12日(月) 愛知県豊田市/市体育館前運動広場・千石公園ソフトボール場

第26回全日本大学男子選手権

日ソ協記録委員 服部 辰夫

日体大、2年ぶり20回目の優勝飾る!

表記大会は、第7回豊橋大会から19年ぶりの愛知県で、世界に誇る自動車のメッサ・豊田市において32チームの参加で開催された。

第1日目第1試合で、前年度優勝の東海大が山本投手の立ち上がりを攻められ、関西の雄・立命館に敗れる波瀾の幕開けとなった。

また、仙台大が岡山大戦で、長打5本を含む本大会最多の20安打と機動力を活かした7盗塁等で15点をあげる試合もあったが、ほぼ順当なチームが勝ち進み、地元3大学も揃って1回戦を勝って大会を盛り上げた。

今大会は無四死球試合が8試合もあり、投手力の向上がうかがわれ、2、3回戦になると緊迫した好試合が続き、少ないチャンスを活かすチーム、長打力のあるチームが勝利することが多かった。

投手では、1回戦で敗れはしたが、

聖徳岐阜教育の平峯、2回戦で国士館の長打力に敗れた第一経済大の脇坂、早稲田戦で延長8回に力尽きた山梨学院の石塚、尻上がりに調子を上げた早稲田の長谷川、神戸学院の飯田・井上

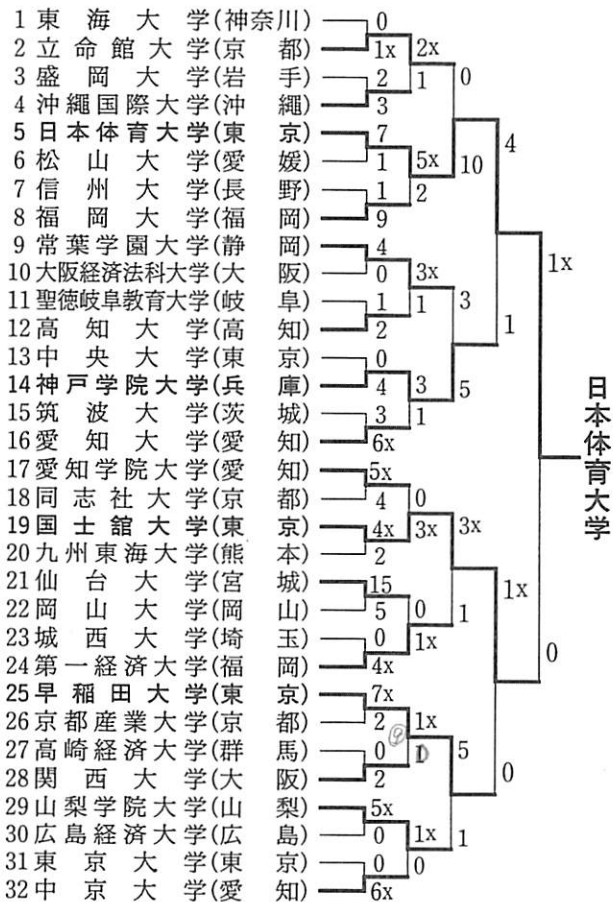
2試合連続の無四死球試合と55個の最多奪三振を記録した国士館の兼久、絶妙なコンビで相手打線を翻弄した日体大の宮平・市瀬らが活躍した。

打撃面では、優勝の原動力として驚異の打率6割をマークし、長打力をも兼ね備えた富岡と4割台で選球眼のよい坂下の日体大1、2番コンビ。惜しくも準優勝の国士館の宮城・江崎・石渡のトリオと佐藤。神戸学院の長打力と走力のある5割打者・讃岐と有田・岡澤・白井。投打に活躍の早稲田長谷川があげられる。

緊迫の決勝戦

決勝戦は息詰まる熱戦で、前半は国

第26回全日本大学男子選手権 平成3.8.9~12



スコア・戦評

決勝戦(12時12分~14時9分)

日体大、8回サヨナラ勝ち

国士館	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
日体大	0	0	0	0	0	0	0	1x	0	0

(国) ●兼久―宮城
(日) ○宮平―吉田
▽(三)宮城(国)

(審) P 神谷 1 野崎 2 山下 3 川口
両チーム再三走者を得点圏に送るが、



好評の“じょんがらソーメン”

“じょんがらソーメン”無料サービス 参加選手に人気呼ぶ

町民の真心と、町特産のキウイ入り
そうめんを味わって——と、石川国体
リハーサル大会の会場で、町の婦人た
ちで組織した大会特別実行委員が昼食
時に、そうめん7百食を無料サービス
した。

甘酸っぱいキウイフルーツの味がそ
うめんに合わせて、日ソ協派遣の加藤審
判長ら選手、役員に大受けし、心温ま
る特別メニューにみんな舌つづみを打
った。あまりの好評に次の日も7百食
を追加、婦人たちは、来年の国体でも
“じょんがらなべ”をサービスすると張
り切っていた。

この特別実行委員会は、婦人会や各
種スポーツ団体に呼びかけて結成され、
事務局、集団演技、接待、記念品作り、

衛生の5組織を設け、国体のリハーサ
ルを兼ねて取り組んでいた。

婦人会の余興、大会に華添える

開会式で予定されていた地元婦人会
の「野々市じょんがら踊り」が雨のた
め中止となったが、翌日の競技開始に
先立ちエキジビションとして野々市町
民球場で披露された。

踊りの輪が笛や太鼓、三味線の鳴り
物に合わせてボールをかたちどった円
形から始まり、最後はV字の輪に開く
演技に、選手や観衆から大拍手がわき
試合前の両ベンチも緊張感をやわらげ
ていた。

野々市町の町民一人一役奉仕

子供会から老人会まで、国体を成功
させようの合言葉で大学選手権を国体
リハーサル大会と称して支援した野々
市町は、国体準備一色。

その中で目に映ったのが、子供から
老人まで早朝7時になると会場周辺の
美化作業奉仕活動だった。お年寄りた
ちはそろいのユニフォームで片手に袋
軍手姿で道路脇の紙くず、缶ジュース
の空き缶を拾い、環境の整備に汗を流
していた。

女子担当・日ソ協記録委員上坂 衛
男子担当・日ソ協記録委員長繩雅誠

